

海南島近現代史研究会

第7回定例研究会

7回目の海南島近現代史研究会定例研究会を開催します。
みなさんの参加をお待ちしています。

と き：2011年2月13日（日）13時～17時（開場12時）

ところ：大阪産業大学 梅田サテライト・レクチャーA室
（大阪駅前第三ビル19階）

参加費：500円（会員は無料です）



主題

海南島とパレスチナ

■報告1 パレスチナでの参戦経験 足立正生

60年前、イスラエルは中東で最も豊かな「乳流れ蜜溢れる地・パレスチナ」に「人無き土地に、土地無き人を」と騙って建国された。それ以降、今日まで、パレスチナ人への攻撃占領は続けられ、約半数の400万人が難民として暮らす。その人々の苦難と悲惨は、難民キャンプから出撃するゲリラたちを生み出してきた。その力の源泉は「遥かなる我が故郷」への想いだ。では、何故、60年間も占領と虐殺が続けられるのか？誰がそれを許しているのか？

それらの諸問題は、海南島の人々の今も続く占領と虐殺の悪夢と直結している。

■報告2 今も続くイスラエルの攻撃と占領について オマイヤ・アブード (Omayya Abboud)

1967年以来今でも、レバノンに対するイスラエルの攻撃と占領が続いている。特に、姉や従兄妹たちが戦死した記憶は、私の生き抜こうとする原点だが、殺される恐れの中で生きて来たため、日本にいる今でも、東京の上空を航空自衛隊の戦闘機や輸送機が通る度に身体が自動的に反応して凍りつく。イスラエル国境地帯の村の人々の生活、特に、空襲や戦車隊の侵攻の恐怖が引き起こす精神的肉体的なダメージは、海南島の人々が今もなお抱えている精神的・肉体的な苦痛と共通のものだ。

【研究報告Ⅰ】 マスメディアは海南島侵略をいかに報道したか 5 竹本昇

『朝日年鑑』、『文芸春秋』、『みさを』（海軍将校婦人会発行）、『愛国婦人』（愛国婦人会発行）などが、当時、いかに海南島侵略の犯罪性を隠して賛美してきたかを報告します。

【研究報告Ⅱ】 海南島占領支配の実相 司令部派遣将校報告の分析 久保井規夫

日本軍司令部は、占領地・前線へ将校を調査に派遣した。その調査資料の一部は、防衛省防衛研修所戦史室が戦史叢書にまとめた内容から一部想起できるが、原本の閲覧は困難である。その希有な派遣将校の報告原本を入手できたため、分析し、報告する。

【調査報告】 祖父が海南島で何をしたのか 糟谷尚子

戦時中、海南島に赴任していた祖父。祖父の残した記録を元に、祖父が、日本軍が海南島で何をしたのか、その一端でも知りたいと思い調査した結果を報告します。

■2011年2月末～3月初めの海南島「現地調査」の主目的と日程

■海南省民族学会、海南民間抗戦研究会準備会との共同研究・共同調査について

海南島近現代史研究会

<http://www.hainanshi.org/>

【事務局】 大阪産業大学経済学部 齊藤日出治研究室

足立正生（あだち まさお）

1939年福岡県生まれ。日本大学芸術学部中退。
学生時代から映画の自主制作を始め高い評価を得ている。

若松孝二や大島渚との共同を続け、脚本執筆や出演もする。

1971年のカンヌ映画祭の帰路に記録映画を若松孝二と製作したことを縁に、パレスチナ解放闘争との共同を開始し、1974年から闘争現場に参加。

2000年に強制送還されて帰国。

その後もパレスチナ連帯の大衆運動を続ける。

更には、映画監督として35年ぶりに、2007年に13本目の作品「幽閉者・テロリスト」を監督し、現在、次の新作を準備中。

2001年来日したオマイヤ・アブードと結婚。

オマイヤ・アブード（Omayya Abboud）

1961年レバノンのベカー高原カラウン村生まれ。

幼少の頃から現在まで、レバノン南部は繰り返しイスラエルの侵略と占領に曝されている。

レバノン大学歴史学部中退。

1982年のイスラエルのレバノン攻撃・占領下で学業も仕事も放棄を強いられた。

イスラエルの空襲で長姉が死亡、従妹と従兄がイスラエル占領軍への戦闘で死亡する。

戦争被害の生活を生きてきた。

日本人鍼灸師との出会いから鍼灸留学を経験し、ベカー高原で医師たちと「健康センター」運動を展開した。

2001年来日し、足立正生と結婚し一女を生んで育てている。

海南島近現代史研究会『会報』第2号序言（2009年2月10日）より

2008年12月27日午前11時半、パレスチナのガザ市上空に侵入したイスラエル軍F16戦闘機60機は、人口密集地域にたいする無差別爆撃を開始しました。

その後、イスラエル軍は、戦闘機、地対地ミサイル、無人機、軍用ヘリコプターなどで毎日爆撃を続け、建物を破壊し、パレスチナ民衆を殺傷しました。2009年1月3日午後7時半、イスラエル陸軍がガザ地域への侵入攻撃を開始しました。それから1月18日午前2時まで、イスラエル空陸海軍は、ミサイル、白リン弾、爆弾、戦車、ブルドーザー……を使って1400人を越す人びとを殺害しました。

人びとが平和に暮らしていた海南島に日本軍が侵入したときから1945年8月なかばまでの6年半、日本政府、日本軍、日本企業は、海南島の人びとに大きな災厄をもたらし続けました。人びとが平和に暮らしていたパレスチナにシオニストの軍隊が侵入したのは、1948年でした。シオニストは、この年5月14日に、占領したパレスチナの大地をイスラエルと名づけました。このときから、シオニストはパレスチナ民衆に大きな災厄（ナクバ）をもたらし続けています。

イスラエルに住むパレスチナ人以外のほとんどの「イスラエル国民」は、ガザ地域でのイスラエル軍の犯罪を支持しています。

ほとんどの日本国民は、台湾領土化、朝鮮領土化、中国東北部・モンゴル東南部領土化……のときと同じく、海南島侵略のときにも、占領地の拡大を喜び、軍事行動を支持し、日本政府、日本軍、日本企業の侵略犯罪に加担しました。

日本が占領していた時期（海南島民衆が日本の侵略に抗していた時期）の日本近現代史、敗戦後の日本近現代史は、同時代の海南島近現代史と重なりあっています。

海南島近現代史は、パレスチナ近現代史と重なりあっています。

70年まえに日本国民は、なぜ海南島侵略を阻止できなかったのかという問題は、いま、なぜシオニストのパレスチナ侵略を世界の民衆が許し続けているのかという問題とつながっているのだと思います。

アイヌモシリ被植民地化140年後、「琉球処分」130年後、3・1朝鮮独立運動90年後、日本の海南島侵略開始70年後の2009年に、本誌が、この問題を、みなさんと共に考えていくひとつの契機となることを、わたしたちは願っています。